

呪詛としての 枕詞

Randy TAGUCHI



田口ランディ (作家)

「チ」という音は、マッチを擦るように発する。

しっかりと密着した上顎と舌が、腹から押し出された強い息で離れるときチが現われる。それが「チ」の力だ。声ではなく息の音だ。

チとは地であり、血であり、乳であり、知……、人間にとって最も大切な力の源が「チ」であるから、チを呼び出すときはチを呼び出すための音をしっかりと唱えるのだ。そうすればチはいまここの身体に放たれる。

「神」の枕詞は「ちはやぶる」。

前述のようにチは、強い摩擦音。ハは「ファ」と発音する。閉じた唇を息の力でこじあける勢いだ。ブはふりつと唇が破れる感じ。ルはブの勢いを借りて舌を震わす。このように全身全霊でことばを発した瞬間、「ちはやぶる」は神を召喚する呪詛となる（と、私は思っている）。

だから、万葉集は音読しなければならない。

歌は詠むもの。詠むと読むは違う。詠むとは命を与えること。万物を讃え、祝福すること。祝うこと。

いわばしるたるみのうえのさわらびのもえいづるはるになりけるかも

志貴皇子の名歌である。

この歌はからっぽだ。無意味である。真に空っぽの器であるから、魂を乗せ時を超える船となる。

「いわばしる」は垂水の枕詞。垂水とは滴る水、滝。竜の文字が入っているとおり、滝の流れは生命体として感受される。しかし、水神として竜を呼び出すための枕詞「いわばしる」は発するのがたいへん難しい。

1959年東京生まれ。『コンセント』でデビュー後『アンテナ』『モザイク』を発表、海外でも評価が高い。原爆を捉えた短編集『被曝のマリア』、ガンを取り上げた『キュア』などのほかにノンフィクション作品も多数。最新作『マジナル』では認識論へ踏み込み新境地を開く。「ふくしまキッズ ふくしまの子どもの安全を守る会」支援委員など執筆を越えた活動も多い。

「いわ」と普通に発音しても「ワ」のあと口がぼかん空いて間抜けである。「岩」を表現するのなら「イ」に特殊な強い緊張が必要だ。「ワ」は発音した時の自分の顔を見れば、その音が畏怖を現わしていると実感できる。「ばしる」の「バ」はパに近い破裂音。「シ」は「シーッ」と人さし指を当てる感じ、そのシの勢いでルを発するため舌を振動させる。

さあ、ではご一緒に発音してみましょう。い、わ、ば、し、る。

ただ一心に発音するだけで、心が大自然の裡に還ってゆく心地がしないだろうか。

心はどこにあるか。どこにもないが、心は音によって言葉として顕現する。このあたりまえの事実のなんという不思議。なんという神秘。

「ちはやぶる」「いわばしる」と全身全霊で発音する時、時を超えて内的外的全世界が、私の脳内にイメージとして発火し、全身を貫通して立ち現われるのを感じる。

ことばは、自然界の御霊。ことばこそ、ふるさとだ。

というわけで、旅先で歌を詠み、古い鳥居に触れては「ちはやぶる」、水に触れては「いわばしる」と発音するのが倣いとなった。

青森県の環状列石、小牧野遺跡を歩きつつ「チ、チ、チ」と火を点すように石の間を歩いていたら、ふと思いついたことがある。

高村光太郎の「智恵子抄」。あれは「智恵子」でなければいけんのだ。「恵子抄」でも「真理子抄」でもいけんのだ。

あれは「チ」の音。チに宿る力のたまものだ……と。